

m3.com 島根地域版掲載

Vol.1:5月19日:元県立中央病院小児科部長が出雲市で開業-クリニック内に動線を二つ確保し、感染防止と利便性を実現

Vol.2:5月26日:医師が持つ引き出しの多さが、患者のQOL向上につながる-アレルギーカンファレンスを定期的実施「県内でアレルギーに関わる仲間を増やしたい」

Vol.1

島根県立中央病院などで小児医療やアレルギー治療に注力してきた医師が、2025年5月、家業の小児科医院を継承する形で新たに小児科・アレルギー科のクリニックを出雲市に開設した。患者はもちろん、付き添う親たちの生活や気持ちにも寄り添った設計・設備・運営にこだわり、質の高い医療の提供を目指している。どれみこどもとアレルギーのクリニックの羽根田泰宏院長に聞いた。

33台分の広い駐車場を設置

——2025年3月末に島根県立中央病院を退職し、5月から地元出雲市に新設したクリニックで診察をスタートしました。

新設したクリニックから約500メートル離れた場所に、祖父が1960年に開業した基常小児科があります。父が引き継ぎ、60年以上にわたって地域の方々と共に歩んできました。私は小児科医になった時から事業承継は意識していたのですが、父が高齢になってきたため、同じ出雲市内にある島根県立中央病院で働き始めた3年前から本格的に準備し始めました。同院での勤務も開業準備を見据えて申し出たもので、病院にも当初から伝えてありました。

祖父が開業した場所で事業を継承した方が患者さんたちには分かりやすく良かったのですが、駐車場が狭いのが難点でした。特に雨や雪などの荒天時、具合の悪いお子さんを抱きかかえてくる親御さんの大変そうな姿が以前から気になっていました。そこで基常小児科から近くて、駐車場を広く確保できる場所を探したのです。



——新クリニックは、駐車場だけでなく診察スペースや待合室なども広く、ゆとりある設計になっています。

2014年から5年間勤務していた島根大学医学部附属病院(出雲市)での経験が影響しています。大学病院の小児科病棟には、心疾患や白血病など重い病気で長期間入院している子どもたちが多くいました。そして彼らを支えているのが親や兄弟、祖父母ら周囲の大人たちです。大人たちは、自宅や職場と病院を行き来しながら闘病中の子どもたちをサポートしていました。子どもらの本質的なサポートには、支えている大人たちのサポートも不可欠だと痛感したのです。

医療として正しいことをしていても、本当の意味で患者さんやご家族をサポートできているのかと問い続け、クリニックの開設にあたっては親御さんたちへのサポートをできる限り突き詰めました。33台分の広い駐車場をクリニック脇に確保したのも、その一つです。

また、感染予防と親御さんたちの利便性の向上を狙って、クリニック内の空間的な隔離を実現しました。小児科の大事な役割の一つは予防接種ですが、同時に風邪や発熱などの疾患も診ます。両方の来院者が混ざるのは避けたいため、多くのクリニックでは時間を分けて対応しています。

しかし、それでは親御さんたちの利便性を犠牲にしまいます。そこで診察時間内であ

ればいつでも来られるように、当クリニックでは動線を二つ設け、入り口や待合スペース、診察室を分けました。費用はかかりましたが、やりがいのある勤務医を辞めて開業するのであれば、自分がやりたいことを可能な限り実現したいという思いでした。

個室を 7 つ設置、そこに医師が出向いて診察

——せきや発熱などの症状がある患者のエリアには、個室を 7 つ設置。アーチ型のカラフルな扉にはいずれも異なる動物の絵が描かれています。

当クリニックの医師は私と父の 2 人ですが、個室を多く用意したのはつらい状況の患者さんを動かしたくなかったからです。患者さんは受付後、各個室で待ってもらい、医師が部屋まで出向いて診察します。付き添いの兄弟がいたり、おむつや着替えなど多くの荷物があったり、点滴などで長時間かかったりする場合にも対応できるよう少し広めの部屋も備えました。

一方、予防接種やアレルギー疾患など感染の可能性がない患者さん用のエリアは、待っている間も少しでも楽しく過ごせるよう色や形、デザインにこだわった待合室を設けました。例えば、体重測定は子どもによっては羞恥心や恐怖心を覚えます。そこでスペースの奥にさりげなくブロックで隠したエリアを設け、測定しながら子どもが探し絵遊びなどができるような壁を配置しました。丸みのあるデザインを多く取り入れて安心感や親しみやすさを創出したり、子どもが好きな区切られた空間を作ったりもしました。

内装に関する助言をいただいたのは、島根大学医学部附属病院時代に知り合ったチャイルド・ライフ・スペシャリストの方です。子どもの精神的負担をできるだけ減らしつつ、遊びを通して子どもの主体的な力を引き出せるよう、いろいろアドバイスをいただきました。また設計士の方は、私が伝えたイメージを想像以上の形で具現化してくれました。注射は子どもにとって嫌なものですが、少しでも恐怖を軽減し、再び来たくなるように工夫を凝らしてくれました。



個室の待合室兼診察室

インカムやモニターを活用し、医療 DX も推進

——クリニックが広いと、スタッフが動き回る面積が広くて大変ではないですか。

クリニックでは、スタッフの動線が短い方が機能的です。しかし、患者さんや付き添いの親御さんたちの利便性、快適性を考え、機能性をオペレーションでカバーしようと考えています。

スタッフは、医師 2 人、看護師 5 人、事務員 3 人と決して多くはありませんが、全員が機能的に動けるよう設計やシステムを工夫しました。二つの待合・診察エリアの真ん中にナースステーションを設け、待合スペースの様子を映したモニターを見たり、各自が身に付けたインカムで連絡を取り合ったりして情報を共有します。看護師は基本、担当エリアを持ちますが、混雑状況などによって他のエリアもカバーします。

医療 DX も進めています。Web 予約や Web 問診、電子カルテなどに加え、セルフレジも導入。払い忘れなどのリスクはありますが、事務員さんの利便性を優先しました。支払いを行う親世代は QR コードや電子マネー決済に慣れており、セルフレジへの信用性も高いですしね。

とても優秀なスタッフが集まってくれたので、少人数ながら連携を取り合うことで質の高い医療を提供できると考えています。

島根大学病院、松江赤十字病院、県立中央病院でアレルギー治療に注力

——島根県に U ターン後は、三つの中核病院の小児科で勤務し、アレルギー治療にも注力してられました。

山口大学医学部を卒業後、10 年間は主に山口県内の病院で働き、2014 年に出身地である島根県に戻りました。島根大学医学部附属病院に赴任した当時は、小児科のアレルギー専門医が県内で私 1 人。そこでまず小児アレルギー患者さんへの対応の基盤づくりに力を入れました。

具体的には、食物経口負荷試験を実施できる環境を整えていきました。アレルギーが疑われる食品を患者さんに口にしてもらうことはリスクを伴いますが、一方でさまざまな食事を食べてもらえるようになることで患者さんの QOL の改善を目指していくことができます。しかし試験には、看護師や栄養士など多くのスタッフがチームで臨む必要があります。当時島根県内では、試験の必要性自体は一部認識されていましたが、実施できる環境が十分整っていませんでした。そこで、食物経口負荷試験の必要性を多職種に伝えていくことからスタート。試験を行えるプラットフォームづくりを地道に進めていきました。アレルギー専門外来も担当させてもらいました。

院内のスタッフだけでなく、開業医の先生方への学術的アプローチや一般市民の方々への啓発活動も積極的に行いました。大学病院内でのプラットフォームづくりがある程度仕上がり、後輩医師も育ってきたため 2019 年、隣接する松江市の基幹病院、松江赤十字病院に希望して異動。同じようにアレルギー治療の基盤づくりに注力しました。

島根県内には小児科医が少ないため、医師は専門性を高めるだけでなく、ある程度守備範囲を広げていく必要があります。医療の均てん化を目指し、高い専門レベルを保ちつつ、小児医療全体の底上げも図るという命題は、非常に困難ですがやりがいがありました。しかし、出雲市内で開業医をしている父親が高齢になってきており、事業継承のリミットも感じていました。2022 年からの島根県立中央病院での勤務を経て、出雲・松江圏域で小児アレルギー治療のプラットフォームづくりが一段落ついたこともあり、2025 年 5 月の開業を決めました。



AI 搭載検査機器など最新医療機器を各種整備

——新クリニックは小児科とアレルギー科を標ぼうし、各種最新医療機器も導入しています。

出雲市内のクリニックではまだ珍しいのが、一つの検体で 15 項目の細菌やウイルスの有無を確認できる「SpotFire」です。原因を知りたい患者さんの要望に応じ、的確な診断をサポートするために必要だと考えました。

1 滴の血液で 41 のアレルギー項目を調べることができる「ドロップスクリーン」も導入しました。アレルギー学会が推奨する検査に比べ、信頼度がやや落ちることなどから専門医はあまり使わない機器なのですが、アレルギー源を特定したい患者さんのニーズに応えたいという思い、さらに当クリニックには検査結果に対してフォローできる体制があることから整備しました。

鼻の奥に綿棒を入れるインフルエンザ検査がトラウマになって嫌がる子どもが多い中、問診とのどの写真で痛みなく検査できる AI 搭載の検査医療機器「nodoca」は患者さん

の負担を少なくできると考えました。40年以上の臨床経験がある父に比べれば私の経験値はまだ低い。AIも活用し、正確でスムーズな診断につなげていければと思います。

そのほか呼吸機能測定装置や一酸化窒素ガス分析装置も導入しています。いずれも医療の質向上と、患者さんの負担軽減をサポートするものとして活用していく考えです。

——小児アレルギー治療に注力されてきた理由を教えてください。

祖父や父が小児科医だったため、小児科医という選択肢は自然に抱いていました。未来がある子どもをサポートすることで地域を元気にするお手伝いをしたいという思いもありました。そんな中、アレルギーに関心を持ったのは、指導医の影響に加え、生活と密接に関わりがあり、学問的にも興味深いと感じたことが大きいです。

父の専門である循環器疾患に比べ、アレルギーで亡くなる子どもはほとんどいません。どちらかと言えば、QOLと関連するジャンルです。治療にはいろんな選択肢があり、例えば食物アレルギーの場合、該当する食物を食べなくてもいいし、少しずつ食べていってもいい。患者さんによって“正解”は異なります。医師は患者さんや家族に寄り添いながら、最適な答えを提案・提供していく必要があります。医師の引き出しの多さが、患者のQOL向上に大きく影響するのです。

また、アレルギーはまだまだ分からないことが多いので、学問的にも興味深いです。日本では全人口の約2人に1人が何らかのアレルギー疾患に罹患していると言われていきます。肉眼では見ることができない原因に対し、仮説を立てて、一人一人に対応していくことにはやりがいを感じています。

——今後の抱負を教えてください。

まずは島根県内でもっとアレルギーに関わる仲間を増やしていきたいです。帰郷した2014年当時、私一人だった小児科のアレルギー専門医は現在4人。約7年前からは、島根県内の医師らと定期的にオンラインでのアレルギーカンファレンスを続けています。しかし、少ない人数で多くのアレルギー患者に質の高い医療を提供していくには、医師だけでなく看護師や保育士、栄養士など患者さんに関わるすべての関係者を仲間にしていく必要があると考えています。アレルギー疾患の患者指導を専門にするメディカルスタッフである小児アレルギーエデュケーター(PAE)は、まだ県内に3人しかいません。このPAEも増やしていきたいです。

病診連携の強化や市民への啓発も進めたいと考えています。急性期と慢性期・回復期の役割分担を今以上に行えれば、医療従事者にとっても患者さんにとっても、よりよい医療環境が整うはずです。

大学病院勤務時代から市民向けの公開講座などを積極的に行ってきましたが、一次医療を担う立場になったことで一層地域の方々とは距離が近くなり、情報も届けやすくなったのではないかと思います。クリニックの2階には患者会や勉強会などの用途を想定した多目的ルームを設けたほか、外観からも親しみやすさを感じてもらえる工夫をしました。地域のシンボルのような存在になればと思います。



クリニック外観

【取材・文・撮影＝m3.comライター 門脇奈津子氏】